

第二言語語用論を意識化するためのプロジェクト・ベース英語指導の試み

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 吉富 朝子

【発表要旨】

本発表では、外国語としての英語教育において、第二言語語用論をいかに指導するべきかを探求するためのアクション・リサーチについて報告する。

近年中間言語語用論の研究が盛んになり、外国語指導においても第二言語の語用論的な側面を明示的に指導することの効果が実証されている。同時に、実践的コミュニケーション能力を育成する指導の一旦として、タスク・ベース指導、プロジェクト・ベース指導、あるいはプロセス・シラバスなど、何らかの明確な目標のために外国語を用いることで外国語能力を伸ばし、学習のプロセスに重きを置いた外国語指導が行われるようになっていく。そこで、本研究では、英語コミュニケーションにおける語用論の役割に対する意識を高めることを目的としたプロジェクト・ベースの授業の効果を検証する。

調査対象は、国立大学で英語を専攻している日本語を母語とする中上級レベルの英語学習者 70 名である。授業は 1 学期 15 週間に渡って行われ、プロジェクト・ベースで 6 つの言語機能について学ぶことを目的とした。授業はすべて英語で行われ、グループ学習の形式をとった。受講者は、クラスで語用論、ポライトネス、異文化間コミュニケーション等に関するリーディング教材をとおして基礎知識を学んだのち、グループごとに特定の発話行為についてのリサーチに取組み、調査結果をクラスに報告するプレゼンテーションを行なった。リサーチに際しては、グループが調査対象としている発話行為に関する文献を探し、リーディング・要約を中心としたライティング活動を行うこと、音声データ収集のために映画・テレビ番組・YouTube の視聴や、英語母語話者および英語学習者へのインタビューを介してのリスニング・スピーキング活動を行うこと、グループ発表および期末レポートのためのスピーキング・ライティング活動を行なうことなどが課された。つまりプロジェクトを通して、英語の 4 技能を使用しつつ、言語機能に関する知識を身につけ、リサーチ方法について学び、プレゼンテーション・スキルを伸ばすことを目的とした。

成果として、学習者主体のプロジェクトであったことから、履修脱落者が一名もでなかったこと、リサーチのために相当量のリーディング・リスニングを行なったこと、コミュニケーションにおいて語用論的知識を有することが重要であるという気づきがあったこと、リサーチとはどういうものであるかについて実践的に学べたことなどが挙げられる。いっぽうで問題点としては、「正解」が規定しにくい語用論において、「こういう場面ではこう対応すればいい」というステレオ・タイプを形成しがちであるということや、メタレベルで第二言語語用論について英語のみですべての議論を行うことは難しく、グループ活動中の日本語の使用が時として目立ったことなどが挙げられる。